

「葦」33号発刊によせて

奈良県立医科大学附属病院

看護部長 森 本 智磨子

平成13年度は、クリティカルパスを更に推進・インフォームドコンセントを十分行い倫理のある看護を提供・医療事故を防止するを目標に頑張ってきました。そして、今年も1年間の看護の成果を「葦」33号にまとめ発刊できますことを大変うれしく思っております。月日の経つのは早いもので、平成9年4月大学から県立三室病院へ異動になり再び異動により、平成13年4月大学に帰って参りました。そして、皆様に暖かく迎えられました事が、つい昨日の事のように思えるのですが早くも1年が過ぎてしまいました。

一度、大学を外から見つめそして再び中に入って感じました事は、経営改善にむけて大学全体が頑張っている事を強く感じましたが、反面看護部の定数が削減された事には大きなショックを受けました。その上4月当初より22名の欠員と言う大変厳しい状況の中でベット稼働率が全体で94.2%、一般病床のみでは98%と大いに貢献致しました。これもスタッフ皆様のお陰であると深く感謝するしだいです。

二つ目は「看護記録」についてです。オーダリングシステムが導入されたにもかかわらず、看護記録にほとんど活かされてなく記録に時間をとっていることです。今後検討すべき課題のひとつであるように思います。

三つ目は「新人教育」の見直しです。四大・短大の卒業生が増えてくると共に、リアリティショックが大きく4月～6月にかけて退職者が出てくる、これをくい止めるにはどうすれば良いか。当大学附属の看護短期大学も4年制大学に向けて検討に入った。平成16年4月開校予定である。臨床側としても教育だけでなくいろんな面において考えなおさなければならない時期が来ていると思います。

また4月よりC棟の建設にも入り、いろんな問題が山積されていますが私達看護部は、理念に沿った看護を提供し県民の信頼を得、愛される病院として努力を重ねていかなければと思っています。